

アントウェルペンのポルトガル人

— イベリア商人コロニーとその活動 —

中 沢 勝 三

はじめに

近年、アントウェルペン史関係の研究がかなり盛んに刊行されるようになった。ところでこれらの研究の多くは、おおよそ1960年代前半から少しずつ対象と視角をずらしてきているように思われる。⁽¹⁾ 研究の趨勢は、一方で対象により密着した個別的研究に向かいつつあると同時に他方では16世紀後半から17世紀前半の時代に対して再検討をねらった潮流が目につくのである。⁽²⁾

そこで本稿では、比較的最近の研究に依拠して、この16世紀後半以降のアントウェルペン市場をめぐる状況について、とくにポルトガル人の関与を、コロニーとその経済活動 — それも商品取引に限って — という観点から追跡してみることにした。ポルトガルの活躍は、アントウェルペンを国際市場に押し上げるのに決定的なインパクトを与えたといわれながら、世紀中葉以降、その主要な事業である胡椒取引の拠点を同市場から引き上げさせていったとみなされている点で、⁽³⁾ 見直しのための好個の素材を提供してくれるものと考えられるからである。⁽⁴⁾

(1) その一つの動向を伝えるものとして、拙稿「アントウェルペン史研究の新段階」『西洋史研究』新輯7号、1978年、参照。その後H. Solyの*Urbanisme en Kapitalisme te Antwerpen in de 16de eeuw. De stedbouwkundige en industriële ondernemingen van*

Gilbert van Schoonbeke, Brussels, 1977.を得、Van Schoonbekeの事業の全貌が視野に納められることになった。

(2) W. Brulez, "Anvers de 1585 a 1650," *Vierteljahrsschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*(以下VSWGと略), 54(1967); J. A. Van Houtte, "Déclin et survivance d'Anvers," *Studi in Onore di A. Fanfani*, 5, Milano, 1962, in rep., id., *Essays on Medieval and early modern Economy and Society*, Leuven, 1977. といった研究がそうした傾向に先鞭をつけているように思われる。新しい潮流を告知する研究として以下のものを挙げておく。V. Vazquez de Prada, *Lettres marchandes d'Anvers*, Paris, 1960.; W. Brulez, éd., *Marchands flamand à Venise, I (1568-1605)*, Bruxelles-Rome, 1965; V. M. Godinho, *L'Economie de l'Empire portugais aux XVe et XVIe Siècles*, Paris, 1969; H. Kellenbenz, "Die wirtschaftlichen Beziehungen zwischen Antwerpen und Brasilien," *VSWG*, 55(1969); E. Stols, *De Spaanse Brabanders of de Handelsbetrekkingen der Zuidelijke Nederlanden met de Iberische Wereld 1598-1648*, Brussel, 1971; H. Pohl, "Zur Bedeutung Antwerpens als Kreditplatz im beginnenden 17. Jahrhundert," in: *Die Stadt in der Europäischen Geschichte, Festschrift E. Ennen*, Bonn, 1972; id., *Die Portugiesen in Antwerpen (1567*

-1648), Wiesbaden, 1977 (VSWG Beiheft Nr. 63); R. Baetens, *De Nazomer van Antwerpens Welvaart. De diaspora en het handelshuis De Grootte tijdens de eerste helft der 17de eeuw*, Brussels, 1976.

- (3) こうした把握については H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy (14th.- 16th. centuries)*, The Hague, 1963, II, p. 155. 参照。なお、当初のインパクトについては、拙稿「アントウェルペンの興隆と銅＝香料交易」弘前大学『文経論叢』14巻4号、1979年、参照。
- (4) コロニーの形成とそれに依る活動という観点では、当面少なくともポルトガル人のアントウェルペンでのコロニー形成という側面と、同時にフラマン人のイベリア半島でのコロニー形成という側面が検討されなければならないが、本稿では前者の側面の検討に限った。なお、後者の側面についての研究として注(2)で挙げた E. Stols の著作の他に、論文集 H. Kellenbenz, hrsg. *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, Köln-Wien, 1970. に収められた論文の中に注目されるものがあるが、特に、B. Bennassar, "Marchands flamands et italiens à Valladolid au XVIe siècle,"; E. Stols, "Les marchands flamands dans la Péninsule Ibérique à la fin du seizième siècle et pendant la première moitié du dixseptième siècle,"; J.P. Berthe, "Les flamands à Séville au 16e siècle" の諸論稿、それに編者の解説が重要であろう。

1 16世紀中葉までのポルトガル人

16世紀中葉までのアントウェルペン市場の興隆と繁栄の様相については別稿に委ねることとし、⁽⁵⁾本節では以下の検討に必要な限りで当該時期のポルトガル人のアントウェルペンとの係わ

りをみておきたい。

ポルトガル人は、ネーデルラントにおいては12世紀から15世紀にかけてブリュッヘを活動の本拠地としていた。そしてのちのアントウェルペンにおいてと同様に、ポルトガル人は他の外地商人と並んで一つの「居留民団」*natie* を組織し、特権を賦与されていたのである⁽⁶⁾。そしてこの特権の基礎は、ブルゴーニュ公とポルトガル王との間の互惠主義であったという。こうした友好関係は、1477年のカルル豪胆公 Karel de Staute の陣没、つまりブルゴーニュ公国の瓦解と共に大きく動揺し、フランドルでのポルトガル交易は落ち込み⁽⁷⁾、相互の交易は途絶したものである。こうした動揺の背景には、ハプスブルク勢力のネーデルラントへの進出に対するフランドル諸都市の抵抗という政争が絡んでいるのであるが、新たにネーデルラントの支配者となったマクシミリアン大公が1484年3月に外地商人に対してフランドルを離れよと命じ、結局外地商人はブリュッヘからアントウェルペンへ向かって挙って移動することとなった⁽⁸⁾。1488年6月には外地商人はアントウェルペンにおいて、彼らがブリュッヘで享受していたのと同じ特権を与えられ、ポルトガル人のコロニーも大だ的にアントウェルペンに移った。ここに外地商人をめぐってブリュッヘとアントウェルペン両市の間で悶着が始まったのである。ところでポルトガル人のコロニーは、未だブリュッヘが奢侈品市場・貨幣市場としての地歩を失なっていなかったために、1493年以後再びブリュッヘに戻り、この事態は1498年まで続くのである。しかしながらこの間に、こうした政争を巧みに利用し、かつまた世界経済の地殻変動に乗じて、1490年代にアントウェルペンが一挙に国際商都として躍り上がるにつれ、1498年にはポルトガル王代理人 Faktor がアントウェルペンに居留するという事態が現出し、1511年頃までにはポルトガルのコロニー全体が同市に移住・

定着を終っていた⁽⁹⁾。そしてこの年同市はポルトガル人に対して「ポルトガル館」Huis van Portugal を中心部の Kipdarp に与えたのであった⁽¹⁰⁾。

この間、ポルトガルがネーデルラント交易を保持したのは、15世紀中葉以来一貫してアフリカの植民地物産（例えば malaguetta）の販路と、同時にアフリカ交易に用いるための対価——特に金属——を求めたためであって、こうしたポルトガルのネーデルラント交易の特質は後にアジア交易に重点が移ったとしても概ね16世紀前半を通じて続いたといえるのである⁽¹¹⁾。こうした意味あいにおいて、B. Bennassar は、「ケーブ迂回のインド航路の探索はアフリカ海岸の探検の延長上に位置づけられる⁽¹²⁾」といているのだ。ポルトガルはアジアで手に入れた胡椒をはじめとする香料の多くをアントウェルペンで捌き、同時に同市場で銅を主力とする金属を買いととのえたのであった⁽¹³⁾。

(5) 興隆の局面については、拙稿「国際商都アントウェルペンの興隆」『一橋論叢』75巻2号、1976年、参照。全体像を構成するについては、なお取り組まねばならない課題が山積しているといえるのであるが、筆者の把握の仕方として、拙稿「アントウェルペン国際商業の一断面」『社会経済史学』44巻1号、1978年、をも参照されたい。

(6) R. Häpke, *Brugges Entwicklung zum mittelalterlichen Weltmarkt*, Berlin, 1908, SS. 65ff., 71, 91ff.; J. A. Van Houtte, *Bruges. Essai d'histoire urbaine*, Bruxelles, 1967, pp. 55ff.; V. Vazquez de Prada, *op. cit.*, I, pp. 151ff.; J. Maréchal, "Le départ de Bruges des marchands étrangers (XVe et XVIe siècle)," *Annales de la Société d'Emulation de Bruges*, 88 (1951), pp. 26ff., 54ff. etc. なお、「居

留民団」(natie) なる概念について、Maréchal は、「ブリュージュの文書においては、商人コロニー (colonie marchande) (未組織) と外国商人ギルド (gilde marchande étrangère) (組織) の意味で区別をつけずに用いられている」といっている。 *op. cit.*, p. 27 n. 6. なお特権としては 1438 年のものが重要であって、この特権によって natie の構成員が自由に領事 Konsul を選出できるようになった。H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 24.

(7) *Ebenda*. この政治的動乱については、拙稿「国際商都アントウェルペンの興隆」参照。

(8) J. Maréchal, "Départ de Bruges," pp. 31 f., 34; H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, SS. 25, 26. なお注(7)の拙稿においてマクシミリアンの布告の年次を 1483 年としていたが、本稿の年次が正しいので 1484 年と訂正する。

(9) 以上、J. A. Goris, *Études sur les colonies marchandes méridionales à Anvers de 1488 à 1567*, Louvain 1925, p. 38; H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, SS. 25, 26.

(10) V. Vazquez de Prada, *op. cit.*, I, p. 158.

(11) リスボンからアントウェルペンへの船舶の来航は、1545 年を境にほぼ半減している。V. M. Godinho, "Crises et Changements géographiques et structuraux au XVIe siècle," *Studi in Onore di A. Saponi*, II, Milano, 1957, p. 985.

(12) B. Bennassar, "L'explosion planétaire (1415 - vers 1570)," in: B. Bennassar et P. Chaunu, dirigé, *L'Ouverture du Monde XIVe - XVIe siècles*, Paris, 1977, p. 402.

(13) 拙稿「アントウェルペンの興隆と銅 - 香料交易」参照。

2 ポルトガル人コロニー

1511年11月20日にアントウェルペン市はポルトガル人居留民団の構成員に対して次の6点にまとめられる特典を与えた。

1. 1411年以来ブリュッヘで認められていたのと同一の特権の保持。
2. 特典上の他の定住外地人集団との互惠主義。
3. 訴訟の迅速な処理。
4. “Kipdorp”の邸館の使用許可。
5. ワインとビールの一定限度までの免税。⁽¹⁴⁾
6. 荷車賃借料の固定。⁽¹⁵⁾

この特典は、1539年、1542年、1545年、及び1554年に市参事会から更新を認められたが、その際ポルトガル人はとりわけ領事 Konsulの手による裁判権を尊重したといわれている。⁽¹⁵⁾

これらのポルトガル人に対する特典は、ネーデルラントの統治者によっても確認された。つまりカルル5世やフェリーペ2世、さらには全国議会によっても認められたのである。ポルトガル人は、彼らの家族と商品、財産の安全を保証され、自由な交易を営み、いかなる方途によっても彼らの活動に対して課税されることはない⁽¹⁶⁾とされたのである。

ところで、ポルトガル居留民団には全構成員集会があったが、1月6日の領事選任のための集会を別とすると、実質的にはその開会はきわめて稀であって、⁽¹⁷⁾そのため2人の領事とそれを補佐する代議員 Deputierte 6人が選出されたのである。⁽¹⁸⁾領事は居留民団最高の統率者であってその代表者となった。⁽¹⁹⁾また領事は居留民団の構成員の民事事件において第一審の判事でもあった。⁽²⁰⁾

また、ポルトガル居留民の構成員の数は、16世紀前半で約20人、1570年で約80家族という比較的少人数であったと考えられる。17世紀の

半頃で多くて40～50家族であった。⁽²¹⁾

(14) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, SS., 26-27.

(15) *Ebenda*; J. A. Goris, *op. cit.*, pp. 38 f., et 48 ff. 17世紀半ばの時点でのこの特典の最後の更新は1623年であった。H. Pohl. *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 28.

(16) *Ebenda*, S., 27. パルマ公も1585年にこの特典を認めた。*Ebenda*, S., 28. またこの特典はポルトガルのスペイン合併(1580年)後も認められた。

ポルトガル居留民団と市当局の間で係争がなかった訳では決してない。とくにワイン、ビール消費税の免税額と市民軍編成(1577年)に当たっての財政的賦課をめぐって係争があり、この問題は1580年代から深刻化していき、17世紀に入ると次第に特典の撤廃の方向へ向かった。*Ebenda*, SS. 28-35.

(17) *Ebenda*, S. 38.

(18) *Ebenda*, SS. 38-39.

(19) *Ebenda*, S. 48. 国王代理人 Faktor は公的には1548年にポルトガル商館 Faktorei の閉鎖に伴っていなくなった筈である。しかし16世紀後半になっても代理人がいた形跡もあり、何程かの影響を行使していたようである。*Ebenda*, S. 44.

(20) *Ebenda*, SS. 48-49.

(21) *Ebenda*, SS. 62-63, 72.; J. A. Goris, *op. cit.*, pp. 53 ff., 62 f. 他の外来商人の数を少しくみしてみると、1560年頃でスペイン人60家族、38人の独身者、イギリス人が300人から500人、フランス人が140人以上、イタリア人が約90人という数字が出されている。ブリュレは、外来商人の数を最盛期で1,100人とみている。H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 73.; W. Brulez, "Anvers," p. 82.

3 ポルトガル人の経済活動

(1) 「動乱期」のアントウェルペン

ここでは16世紀後半から17世紀前半にかけてのアントウェルペンをめぐるネーデルラントの政治・経済情勢の推移をみることにする。⁽²²⁾

アントウェルペンの繁栄を支えたヨーロッパの政治・経済上の構造は、16世紀50年代を転機として、具体的には1555年のカルル5世退位とフェリーペ2世の登位と共に大きく揺らぎ始め、やがて「全般的危機⁽²³⁾」の時代へと突入していく。そうした情勢の中で、アントウェルペン市場にとりわけ深刻な衝撃を与えたのは、1560年代の対英通商の停止⁽²⁴⁾と、1572年のゴイセンの Den Briel、フリシンゲン、続く1574年のミデルビュルフの占領、つまりは事実上のスヘルデ河口封鎖であった。⁽²⁵⁾ 対英通商の途絶は、15世紀以来当時まで一貫して同市場の繁栄の支柱となっていた毛織物交易の国際的分業構造（いわゆるロンドン＝アントウェルペン枢軸）の瓦解を意味する出来事であったという点で、またゴイセンによるゼーラント諸港の占領はアントウェルペンと北海を結ぶ航路の航海の安全が脅やかされるという点で、共に「繁栄の時代」の終焉を告げるものであった。すなわち、のちにオランダ共和国となる北部7州によって、ネーデルラントの中に、ゼーラントからブラバント北部へかけて東西の「分断」の線が刻まれることになったのであって、このことはアントウェルペン経済の国際市場としての存立を制するものとなっていくのだ。

そして1576年3月に執政レクセセンスが突如没し、その後の政治的収束がつかぬ11月、アントウェルペンは11日間にわたってスペイン兵の略奪にさらされることになった。⁽²⁶⁾ これを転機として同市は北部の陣営に加わった。すなわちこの時点でアントウェルペンの繁栄の帰趨はオラニエの軍事・政治上の成果にかかることにな

ったのである。しかし事態はスペインに有利に展開していった。つまり、1570年代末からパルマ公アレッサンドロ・フェルネーゼによって、着々と南部諸都市の攻略が進み、マーストリヒト(79年)、コルトレイク(80年)、アウデナールデ(82年)、ダンケルク、ニーウポールト(共に83年)、そして1584年にはヘントとブリュッヘがスペインの軍門に下った。⁽²⁷⁾ ネーデルラント南部でのスペインの軍事的優位は揺がしがたいものとなったのである。こうした内陸諸都市の陥落は、アントウェルペンにとって、大陸後背地とのルートの切断を意味した。⁽²⁸⁾ 同市は、先きには外洋との海上ルートの自由を失ない(スヘルデ封鎖)、次いで陸上ルートをもぎとられて、「国際商都」としての機能を果たし得ない窮地に追い込まれたのである。この時期多くの外地商人が同市を離れ、ポルトガル人も全員ではないにせよ、1578年には大挙してケルンへと移った。⁽²⁹⁾ そして1584年7月には同市の包囲が始まり、翌85年8月陥落した。ここにネーデルラントは北部(オランダ)と南部(スペイン領ネーデルラント)にはっきりと分断され、スヘルデ河はLillo以北が北部の側に帰し、封鎖は強固なものとなった。⁽³⁰⁾ こうしてアントウェルペンは国際商都としての生命を終え、同市に替って、ミデルビュルフ、ロッテルダム、さらには次代の国際経済中心地であるアムステルダムが浮上してくるのである。⁽³¹⁾

こうした事態の推移するなかで、アントウェルペンは必ずしも拱手傍観していたわけではなかった。先述したように、「スペイン兵の略奪」を転機に同市は浮沈をかけて北部陣営に加わった。また1581年には外洋との出入口にあたるワルヘレン島に橋頭堡を獲得しようとしながら失敗している。⁽³²⁾

陥落後、アントウェルペンを通じる交易は、なおスヘルデ河を利用する——ただしLilloで積み換えが必要——一方で、ダンケルクやニー

ウポールト、スリュイスといったフランドルの海港をも利用するようになっていった。⁽³³⁾南部では、北部との交易が1574年以来公的に禁止され、85年からは対仏、対英との交易まで禁じられるようになったとはいえ、対敵通商認可料 *licenten* を基にした交易が1598年まで維持されたのである。⁽³⁴⁾スペインは1603年に対敵通商を再び認めたが、高率の関税が課され、翌1604年には再び対敵通商が禁止されるなど政策が二転三転した上、結局1608年最終的に停止されることになった。⁽³⁵⁾さらに南部では運河の開鑿工事が着手された。ヘントーブリュッヘ間の運河は *Plassendale* へと延び — そこでブリュッヘがオステンデと接続(1622年)、この *Plassendale* からニーウポールト(1638年)、さらにダンケルク(1640年)へと接続されていき、1665年にはオステンデ→ブリュッヘ→ヘントを経てアントウェルペンへ最初の船が入港した。⁽³⁶⁾このようにしてスヘルデ封鎖と対敵通商という困難な状況のもとで不利な条件を補なうべく様々な苦闘が試みられたのであったが、すでに時代は同市の昔日の繁栄を復活させえないものへと変わっていたのである。

② この時代の政治史の大筋については次の文献を参照。栗原福也「ネーデルラント連邦共和国」(岩波講座『世界歴史』15, 1969年)

③ T. Aston, ed., *Crisis in Europe 1560-1660*, London, 1965. なお本書そのものの翻訳ではないが、今井宏編訳『十七世紀危機論争』, 1975年。

④ 1560年代の対英関係については次の文献を参照。H. Van der Wee, *op. cit.*, II, pp., 236-238.; J. Wiegant, *Die Merchants Adventurers' Company auf dem Kontinent zur Zeit der Tudors und Stuarts*, Kiel, 1972.

⑤ H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 140. アントウェルペンの封鎖でこれらの

港市が利益を得た。*Ebenda*. なお、スヘルデ封鎖問題については、S. T. Bindoff, *The Scheldt Question to 1839*, London, 1945.

があり、アントウェルペン史研究に大きな寄与を与えてくれるものであるが、この書物の成果は後日の検討に活かしたい。

⑥ H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 141; H. Van der Wee, *op. cit.*, II, pp. 254-255; Jan Van Acker, *Anvers d'escalade Romaine à port mondial*, Anvers - Bruxelles, 1975, pp. 194-197. この時期のスペイン兵の暴動の性格については、G. Parker, "Mutiny and discontent in the Spanish Army of Flanders, 1572-1607," *Past and Present*, 58(1973), rep., in: *id.*, *Spain and the Netherlands 1559-1659*, Glasgow, 1979. を参照。

⑦ S. Groenveld, en al., *De Kogel door de Kerk? De Opstand in de Nederlanden en de rol van de Unie van Utrecht 1559-1609*, Utrecht, 1979. blz., 112. 本文献については佐藤弘幸氏から提示を受けた。記して謝意を表する次第です。なお H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 140.

⑧ *Ebenda*.

⑨ H. Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 254. ディアスポラの実態については、石坂昭雄「16世紀におけるネーデルラント・プロテスタントのドイツ散住」北海道大学『経済学研究』27巻1号, 1977年, を参照。

⑩ H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 141. なお当時のスヘルデ河口の地勢については、S. T. Bindoff, *op. cit.*, p. 8; W. Brulez, "Les escales au carrefour des Pays-Bas (Bruges et Anvers, 14e - 16e siècles)," *Recueils de la Société Jean Bodin*, 32(1973), p. 419. の地図を参照。

⑪ しかしこの時期以降、特に17世紀におい

てアムステルダムが帯びる国際経済中心地としての機能と性格は前代のアントウェルペンのものとは根本的に異なっている。管見の限りでは、邦文文献では以下に挙げた文献以外に両市場の歴史的な性格の相違の意味するところを本格的に論じた研究に出会っていないがこの点の解明は残された重要な課題であろう。石坂昭雄「17・8世紀におけるアムステルダム仲継市場の金融構造」(同著『オランダ型貿易国家の経済構造』1968年, 所収), 1971年。同「オランダ共和国の経済的興隆と17世紀のヨーロッパ経済」北大『経済学研究』24巻4号, 1974年, 25-43頁。栗原福也「ネーデルラント連邦共和国」, 127-132頁。同「オランダ経済の興亡」(角山, 川北編『工業化の始動-西洋経済史講座I-』, 1979年, 所収) 158-163頁。

- (32) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 141.
- (33) *Ebenda*. これらのルートの利用に当っては陸上運送費がかさむことになる。
- (34) *Ebenda*, S. 142. licenten については、栗原福也「世界市場アムステルダムの成立とオランダ経済の特質」『社会経済史学』37巻1号, 1971年, 36-38頁, 参照。

H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 143.

- (35) *Ebenda*, S. 144. しかしながらここでもまた商品の積み換え規制をめぐってヘントとアントウェルペンの間で係争がもちあがってくる。

(2) 商品交易

では以上にみたような厳しい政治・経済環境の下で、ポルトガル人はアントウェルペンを舞台としてどのような経済活動を行なったのであろうか。まず商品交易の関与について、砂糖、香料、毛織物、それに金属の4つを取りあげて

検討してみたい。⁽³⁶⁾

(砂糖) アントウェルペンには15世紀末以降アソーレス、カナリア両群島、マデイラ、北アフリカ、それにサオ・トメ Saõ Tomé から未精糖が搬入され、その精製業が盛んとなっていたが、ポルトガルの関与についてみた場合、とりわけマデイラとサオ・トメ、それに次第にブラジルからの輸入が増大していった。⁽³⁷⁾ その輸入量は、1570年で約5000 Kisten、つまり2000トンにのぼった。⁽³⁸⁾ その後輸入量は次第に減少し、1590年代に一時復活の兆しをみせ90年代の10年間でポルトガル人は18966 Kistenの砂糖をアントウェルペンに持ち込んだ。そして17世紀に入ると、1605年以後の8年間年2000 Kistenの線を維持したが、1613年の5157 Kistenのピークを最後として、1625年以後は大幅な減少傾向を辿っていった。⁽³⁹⁾ こうしたポルトガルの活動の後退の背後には、オランダ西インド会社(1621年設立)のブラジル進出があった。⁽⁴⁰⁾

この間、ポルトガル人がアントウェルペンへ持ち込む砂糖の産地が大きくシフトしている点が注目される。次表にみられる通り、主産地が1570年のギニア湾(サオ・トメ)から世紀末にはブラジルに移動している点が看取されるのである。⁽⁴¹⁾

| 産地 | 1570年 | 1590-1599年 |
|-----------|---------------|--------------|
| São Tomé | 3492 ½ Kisten | 326 ½ Kisten |
| Brasilien | 723 ¾ | 16201 |
| Barbarei | 233 | 19 |
| Principe | 4 | - |
| Antillen | 1 | - |
| Madeira | - | 77 |
| 不明 | 507 | 2342 ½ |
| 合計 | 4961 ¼ | 18966 |

(香料)⁽⁴²⁾ いうまでもなく香料はポルトガルがアントウェルペン市場に与えた最も重要な商品であった。ポルトガルは1548年には同市場

の商館を撤去していたが、16世紀後半に入って独占的地歩は崩れたにせよ、香料は同市場においてなお重要な品目であった。⁽⁴³⁾インドからリスボンへの胡椒交易の統制が一時的に解除されたあと、1570年に再び請負制度 Kontraktssystem が導入されている。⁽⁴⁴⁾これはドイツ人の Konrad Roth が請負ったものであるが、そのなかに30の持分のうちポルトガル商人が10参画していた。ロートが1580年に破産した折には、ポルトガル人は12の持分のうち3½を持っていた。そして、1591年の請負に当ってポルトガル人は12/32の持分をもち、フッガー、ウェルザーと協同したのである。⁽⁴⁵⁾さらに同年、フッガーがこの契約から抜け、この分7/32をポルトガル人が譲り受けた。⁽⁴⁶⁾

ではこの時期のアントウェルペンでの香料交易の実態はどのようなものであったろうか。世紀後半に入って、ハンブルクやリヴォルノ、ヴェネツィアが同市場の競争相手として立ち現われたことは確かであるが、ポールは胡椒について、同市への輸入は1570年代以降下降線を辿りつつも、しかし廃棄されることはなかったとしている。⁽⁴⁷⁾この点交易の全体量を知る手懸りはなく、データは散発的なものに限られてくるのであるが、ヴァスケズ・ド・プラダは、1582年に丁子 giroflée が40キントルしか搬入されていないといっている。⁽⁴⁸⁾そして1590年代は停滞と下降の状態、17世紀に入って1620年頃まで10年間に200-300 Sack の水準、1620年以降はさらに低落したようである。かくして17世紀には、アントウェルペンは香料の地方的市場にすぎなくなっていたと考えられるのである。⁽⁴⁹⁾

(毛織物) 南部ネーデルラントはこの時期イギリス産羊毛に替えて、スペイン産羊毛をもって危機を切り抜けようとした。サーイ織 Sayen がこれである。戦争はホントスホーテに甚大な影響を与え、1590年代には旧来の生産地は停滞していたが、アルマンティエールとリールは

再び上向きに転じ、17世紀前半にはブリュッヘとイープルが上昇していった。⁽⁵⁰⁾この毛織物をもポルトガル人はイベリア半島へ送付している。その足跡は、1580年代と1620年代にいくつかの事例で辿ることができる。⁽⁵¹⁾1627年に、2人のポルトガル人がホントスホーテで120反 Stück の Sargas de anascote (サーイ織銘柄) を買い入れ、これを2隻の船で一旦ハンブルクへ送付し、さらにそれをリスボンに送っているのは戦争のためである。⁽⁵²⁾

(金属) アントウェルペンは金属の市場としても栄えたが、ここでも銅や銅製品の買い手にイベリア諸邦がいた。16世紀前半には、銅は先ず同市場に持ち込まれたあと再輸出されていたのであるが、世紀末頃になると、銅の輸送は多くドイツの港から直接なされるようになっていった。そしてこの際アントウェルペンのポルトガル人は、ハンガリア、ドイツ、スウェーデン産銅の中継者として働いたのである。1627年の公証人文書に記録されたアントウェルペンでのポルトガル人の金属製品の買い付けの内容は細細としたものから成っている。アルトワの鉄釘、針、留め金 (Spangen)、鋼線といったものが並んでいる。⁽⁵³⁾

(50) ポルトガル人はこれら以外の商品交易にも多面的に係わっているが、彼らの活動の趨勢を知るにはこれら4品目を取り挙げれば足りると思われる。

(51) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, SS. 153-156.

(52) *Ebenda*, S. 153.

(53) *Ebenda*, S. 154.; id., "Zur Bedeutung Antwerpens als Die Zuckereinfuhr nach Antwerpen durch portugiesische Kaufleute während des 80 jährigen Kriegen," in : id., *Studien zur Wirtschaftsgeschichte Lateinamerikas*, Wiesbaden, 1976, S. 22.

- (40) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 154. 栗原福也「オランダ経済の興亡」, 166頁。
- (41) *Ebenda*, S. 156. 他にこの主産地のシフトを扱ったものとして次の文献を参照。F. Mauro, *Le XVI^e siècle européen. Aspects économiques*, Paris, 1970, pp. 154 - 155.; *id.*, *Le Brésil du XV^e à la fin du XVIII^e siècle*, Paris, 1977. p. 55ff.
- (42) 16世紀後半の香料交易全般については、栗原福也「16世紀後半の地中海とネーデルラント」『一橋論叢』72巻6号, 1974年, を参照。
- (43) この点, 1567/8年について拙稿「アントウェルペン国際商業の一断面」, 63頁の第6表の価額比率を参照。
- (44) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 166.; Vazquez de Prade, *op. cit.*, I, p. 90.; F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris, 1966. tome I, p. 503.
- (45) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 167.; V. Vazquez de Prade, *op. cit.*, I, p. 91.
- (46) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 167.
- (47) *Ebenda*, S. 168.
- (48) V. Vazquez de Prade, *op. cit.*, I, p. 92. ;なお前半世紀の1530年から1550年の時期ではリスボンからアントウェルペンに年4万ならし45000キントルの香料が持ち込まれちなみに年2回寄港する艦隊のうち1538年6月のそれは25000キントルであって, うち22913キントルが胡椒, 723キントルがしょうが, 706キントル丁子であった。この点, *ibid.*, p. 92.; F. Edler de Roover, "The market for spices in Antwerp, 1538-1544," *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 17

(1938), p. 214.

- (49) H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen*, S. 168.

(50) *Ebenda*, SS. 181-182.

(51) *Ebenda*, SS. 182-183.

(52) *Ebenda*, S. 183.

- (53) 以上, *Ebenda*, SS. 189-193. なお, ポルトガル人のアントウェルペンを舞台とした経済活動は商品取引に限られず, 金融活動, さらに産業活動その他に及んでおり, 特に金融面においてはかなりのちまで相当な影響をもっていたと思われるが, これらの点は本稿では視野に収めることができなかった。

むすびにかえて

以上, 16世紀後半から17世紀にかけての激動の時代のアントウェルペンの交易の様相, しかもその一端を, ポルトガル人の足跡のごく一部を辿ることによってみてきた。この時代は, 16世紀前半の比較的安定した状況とは全く反対に政治・経済が激変した時代である。そして西欧において, 外來商人が国際商業都市の中に確固とした組織と自治権をもつことができた時代の終焉を意味するものでもあった。それに替って, 経済的利害に縁取られた国民国家が — つまりは国家が経済領域に深く関与し, これを取り込んで掌握していく過程 — 明確な輪郭をもって現われてくる時代といつていい。かかる意味で経済史的パークペクティヴからみれば, アントウェルペン市場の落日こそ実は近代西欧経済の生誕を告知するものであり, アントウェルペンの繁栄の姿こそ近代経済の有り様を逆照射してくれるものといえるのであろう。

* 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金(総合研究A, 研究代表者 竹内啓一, 課題「地中海域における集落の形成と発達に関する比較研究」)による研究成果の一部である。